



JAPANESE LANGUAGE EDUCATION METHODS

第 24 回 日本語教育方法研究会
東京工業大学
2005 年 3 月 19 日 (土)

会長 仁科喜久子

今回は、東京工業大学で第 24 回研究会を開催する運びとなりました。
多数の方々にご参加いただけますよう、ご案内申し上げます。

TABLE 1 第 24 回開催について

日 時 :	2005 年 3 月 19 日 (土)
会 場 :	東京工業大学 大岡山キャンパス西 9 号館
開催委員 :	小島 聡・総田はるみ (東京工業大学)

TABLE 2 開催スケジュール

午前		午後	
9:00	発表者受付, ポスター貼付	1:40	総会
9:30	一般受付	2:10	口頭発表開始
10:00	開催校挨拶	3:10	ポスターセッション開始
10:05	会の進め方	4:40	講評
10:10	口頭発表開始	4:50	次回開催委員挨拶
11:10	ポスターセッション開始	4:55	閉会の挨拶
12:40	昼食・休憩	5:00	あとかたづけ
		5:30	懇親会

【参加方法】

事前申し込みはありませんので、直接会場にいらしてください。
懇親会にも是非ご参加ください。

懇親会場：東京ケータリング

【プログラム】

【午前の部】

口頭発表（5件）

1. 学部留学生に対するレジュメの作成指導

茂住和世（東京情報大学）

アカデミック・ジャパニーズ教育実践の一つとして学部2年次の留学生を対象にレジュメの作成指導を行なった。資料・文献を読んで、その内容の大筋を箇条書きで、構成や論の組み立てを意識し、階層構造を示してまとめることを目指した。指導は、単語から文章へ、単純な構造から複雑な構造へと段階的に行なった。始めに箇条書きの練習を、次に分類的・時間的・対比的・因果関係的構成の文章のレジュメ化練習を行ない、総合的練習へと進ませた。ゼミ活動を控えた年次であるための強い動機付け、書く量が少なく学習者の負担感が軽いこと、他者のものと比較しやすく自分のレジュメの難点がわかりやすいことから学習者が取り組みやすく有効な練習であることが窺われた。授業実践を通じ、レジュメ作成に必要なのは、内容の要点や比重がわかる読解力、内容同士との関係を考えその階層を組み立てられる構成力、及び簡潔な表現で箇条書きできる表現力であることがわかった。

2. 終日一教員担当制の引き出す学習環境の安定と言語運用能力の係わり

大石寧子・上田崇仁・福岡礼子・石田愛・中村倫子（徳島大学）

徳島大学留学生センター日本語研修コース（予備教育）では、目標である運用力を身につけさせるために「その日のうちにその日の学習項目を使用して自分の言いたいことが言える」ようにすることを方針として実施している。これをささえるために 実感のある導入 コース終了日まで継続して行うもの 学習項目を通しての日本及び日本人の常識・習慣等の指導 学内外でのタスク 学生・地域サポーターによる授業支援等様々な活動があり、これらなくしては運用力に結びつかない。このような活動を一日の授業に取り入れた授業は、一人の教員がその日のクラス状態を踏まえた上で担当するから成立するものとする。学生のアンケート調査から教員に対する信頼感や日本に来たからこそ受けられる授業スタイルだという声が多く聞かれ、満足度の高いことが伺える。本学の取り組みを検証すると共に運用に繋げる授業展開について意見交換ができればと考える。

3. 遠隔日本語教育の一試み ビデオ会議システムを用いた授業

木原郁子・板橋貴子・河住有希子・高邑真弓（早稲田大学大学院生）

近年、日本語教育に遠隔教育が取り入れられるようになってきた。本稿は、早稲田大学の留学生を対象に、ビデオ会議システムを用いて会話の授業を行い、通常の教室活動と比べどのような相違があるのかを教える側からの視点でまとめたものである。国内における遠隔授業であること、初級の会話の授業であることなどが新しい点である。今回の試みでは、国内遠隔であり、映像や接続による問題は少なかった。しかし、場を共有していないことで距離感を感じる、常に学習者の視線をコントロールする必要があること、また教材や文法の面で通常の授業とは異なる問題があることなどが明らかになった。今後は、機器の活用法のみならず、遠隔教育のための教材開発も求められるようになるであろう。

4. 学習者による「ディスコース構築」の過程

本郷智子・増田真理子（東京大学）

本発表の目的は、学習者自らの「伝えたいこと」を出発点として、談話を作り上げていく「ディスコース構築タスク」(増田 2005)において、学習者が会話技術を意識的に学んでいく過程の詳細を報告することである。会話の目的や扱う内容、参加者の人間関係、共有コンテキストなど、言語処理要素を抽出するシートを作成させ、それを基に学習者それぞれが談話の設計および実践を行った。それを教師やクラスメートと一緒に振り返ることを通じて、学習者が機能や会話技術について内省的に分析する機会を与えることができた。

5. 日本語学習者の講義の聴解行動についての分析

西條美紀（東京工業大学）・藤村知子（東京外国語大学）

本研究では大学の学部に進学する予定の日本語学習者 54 名を対象に、彼らが受講中に取ったノートが試験の

解答に際し有用であるのかを実験により検証した。あわせて、4名の学習者の受講中の行動を録画し、その行動をカテゴリーを設けて、時間軸にそってコーディングして行く方法で分析し、受講中にどのような行動をしている学習者の成績が良いのかについても分析した。実験は、講義の直後に試験を行う直後条件と講義の一日後に試験を行う遅延条件とに別々の被験者を割り当て、それぞれの条件にノートを見ながら試験に解答する群(参照群)とノートを見ないで試験に解答する群(非参照群)を設けて、成績を比較する方法で行った。その結果、遅延条件においては学習者のノートは良い成績を取るために有用であることがわかった。また、成績のよい学習者は受講中にノートの見直しを行い、講義内容と自分のノートを常に関連付ける行動を取っていることがわかった。

ポスター発表(上記5件を含む14件)

6. 本質的なイメージを伝えるためのメタファーを用いた文型導入 - 文末のノダを例に -

藤城浩子(早稲田大学大学院生)

本発表では、メタファーを用いた文型説明の方法を、ノダを例にして紹介する。ノダは、「理由」「説明」「前置き」等々、状況に応じて様々な意味を実現するが、それぞれの用法を列挙するだけでは、なかなかその本質が伝わらず、そのため、理解が運用につながりにくい。しかし、きわめて抽象的なノダの本質を言葉で説明するのも困難で、混乱を招きかねない。このような文型には、メタファーを用いて、原型的なイメージを伝える方法が効果的だと思われる。本発表ではノダの機能を「テキスト形成的機能」(Halliday & Hassan1985)と「対人的機能」(Halliday & Hassan1985)とに分けて捉え、これを反映した the door to the underlying fact /meaning というメタファーを提案する。

7. 音声教育活動の授業分析

河野俊之(横浜国立大学)

音声教育に関する研究では授業分析が行われることは少ない。そこで、本研究では、FOCUSを用いて、音声教育の活動を分析した。その結果から、教師指導型から脱却する必要があり、学習者の活動を増やすために、できるかぎり教師の発話を減らす必要があることなどを述べた。

8. 「簡潔にまとめる」ための日本語上級文章表現の指導

鎌田美千子(宇都宮大学)・虫明美喜(東北大学)

大学での学習・研究生活では、レポート・論文作成の他に、発表活動に伴うレジюмеや提示資料の作成においても「書く」技能が必要とされる。見出しや箇条書きをはじめとするレジюмеや提示資料における表現は、レポート・論文の文章とは異なるため、まとまった文章が書ける上級学習者であっても、形式・表現双方で問題が観察される。そこで、学部留学生を対象に、見出し・箇条書きに焦点を当てた指導を試みた。本実践では、具体的なタスクと定着のための問題演習を課すことで「簡潔にまとめる」ための日本語表現能力の向上を目指した。実践の成果としては、(1)「簡潔にまとめる」ことが学習者に意識化されたことによって、形式・表現双方で改善が見られたこと、(2)見出し・箇条書きに「簡潔にまとめる」上で必要となる語彙を焦点化した指導が可能になったこと、などが挙げられる。なお、本発表では、レジюмеや提示資料において、見出し、箇条書き、図中の語句等によって内容を明確にまとめることを「簡潔にまとめる」と呼ぶ。

9. 漢字コースにおけるオンライン教材(WebCT Vista)の利用

石崎俊子(名古屋大学)

今年の4月に開講する初、中、上級用の漢字コースの補助教材としてWebCTVistaで作成されたオンライン教材の紹介をしたい。記入問題、選択問題、穴埋め問題など様々な問題が用意されている上、学習者は問題の正誤及び正答が即座に得られ、その上自分の成績を知ることも出来る。また、問題は日本語検定試験の2,3,4級別に作成されているので試験対策のためにも大いに利用されると確信している。

10. 日本語学習者はWeb教材をどのように使用するか

- 場面別入門会話Web教材FirstStepの改善に向けた事例研究 -

桜木ともみ・佐藤礼子(広島大学大学院生)

本稿は、来日前に日本語学習の機会を持たない日本語学習者へのサポートとして作成・公開したWeb教材First

Step の評価と改善を目的としている。教材作成にはその評価と改善が一連の作業として求められるが、Web 教材は自主学習教材として指導者なしで使用されることが多いため、特に操作性の検証は欠かせない。そこで、6名の日本語学習者を対象に、使用状況の観察と使用後の半構造的インタビューを行い、実際に学習者がどのように教材を使用するかを検証した。使用状況の観察から、1) 示されている基本的な使用順序を取った学習者と、ゲーム形式の確認クイズを場面別学習ページより先に行った学習者がいること、2) 学習の始め方や進め方の分析から、教材への注意の払い方に個人差があることが観察され、操作性の改善について示唆が得られた。インタビューでは、来日一日目に必要な表現に限定したこと、シンプルで分かりやすい構成が支持された。

11. 例文利用を促進させる日本語表現支援システムの開発と評価

廣田祐紀（東京工業大学大学院生）・仁科喜久子（東京工業大学大学）

日本語作文支援において従来のシステムでは、文章自体の内容が典型例文によって構成されており、実用に際してその例文自体の有用性についてあまり検討されていない。また、システムのデータが増えてくるとユーザーの利用過程における、入力による検索や視覚的に解りやすいインターフェイスも重要になってくる。本研究では著名な作家による日本語の表現を分析し集めることで豊かな表現を人間関係と共に示した。そして、計算機の機能を十分に発揮するために「全文検索ソフト Namazu」を利用してユーザーにとって豊富な量の表現を高速で検索できるシステム開発を行った。これによりユーザーにとって手紙文などをはじめ、メールや web 上でのこれからの時代における実用場面での例文の用法理解が促進された。

12. 中級日本語学習者の意見文における論理的表現

田代ひとみ（明海大学）

アカデミックジャパニーズでは論理的文章が求められている。論理的文章の1つである意見文は、条件・原因理由・譲歩・逆接など論理的な表現が使用されるため、本研究では、論理的な表現を表す節や、結束性を示す表現（接続詞・指示詞）の使用に注目し、中級日本語学習者（中国語母語話者、韓国語母語話者）の意見文を日本語母語話者と比較した。その結果、譲歩、逆接などの節の使用は特に中国語母語話者に少なかった。原因理由に関して、日本語母語話者は、原因理由の節以外に「～からです」「理由は～」などの表現を日本語学習者より多く使って明示的に表明していた。接続詞については、日本語学習者が多く使用し、指示詞は中国語母語話者の使用が少なかった。量的分析からは中国語母語話者に多くの相違点が見られたが、質的分析により、日本語母語話者は、より多くの手段で論理を展開することが示唆された。

13. 文章産出に対するメタ認知的ストラテジーの意識化を目標とした授業について

衣川隆生（筑波大学）

筑波大学留学生センターでは、2004年度より自己制御学習力を育成することを目標としたアカデミック作文の授業を開講している。本稿では、この授業のうち作文過程、文章構造、文章産出環境に対するメタ認知的ストラテジーの意識化を目標とした活動に焦点を当て、受講生の学習目標がどのように達成されたかをフォローアップインタビューの結果に基づいて分析する。分析の結果、作文過程、文章構造を意識化する活動は、作文ストラテジーを活性化させることに効果が認められたが、社会的ストラテジーの育成には課題が残されていることが明らかとなった。

14. 学習者の産出する形容詞共起表現に関する分析

曹紅?（東京工業大学大学院生）・仁科喜久子（東京工業大学）

語彙運用の中で特にコロケーションは、語の意味、具体的な組み合わせのどちらにも関係があり、語彙習得の一側面として大変重要である。本研究は学習者の産出したコロケーションに注目して、学習者コーパスから形容詞のコロケーションを抽出し、コロケーション産出の量と質について考察し、正しいコロケーション(正用)と不自然なコロケーション(誤用)の比較を行った。難易度から見れば、形容詞語彙の用法の難易度と誤用は深く関連し、正用関係の形容詞語彙よりかなり難しいグループであることが明らかになった。また、対応する中国語訳のコロケーションが成立するかどうかを見るという手法で、語彙習得における母語の転移について実証的な分析をした。

【午後の部】

口頭発表（5件）

15. Web を利用した日本語学習者の読解プロセス測定を試み - システムの開発について -

高橋亜紀子*・内山潤**・安藤明伸*（*宮城教育大学・**東北大学）

大学や大学院の正規生として学ぶ外国人留学生の増加に伴って、読解能力を効果的に養成することがますます重要になっている。効果的な読解指導には、現場で教えている教師自身が自分の教えている学習者の読解プロセスを理解し、指導に反映していくことが必要である。しかし、読解プロセスを調査するための従来の方法は時間とコストがかかりすぎるため、現場の教師が自分の教えている学習者を対象にして簡易に実施できるようなものではなかった。そこで、読解プロセスの測定を簡易化するために、「Web を用いた読解プロセスの測定システム」の開発を試みた。本システムは、Web 上に日本語テキストと個々の文についての読解をサポートする情報とを用意し、学習者がどの文でどのサポートを利用したかをサーバー上にログとして記録し、ログを分析することで読解過程を推測するというものである。本発表では、このシステムの概要について述べる。

16. タスクベースのカリキュラムに取り入れた「ポスター発表」の実践報告

井之川睦美（群馬大学）

大学生活においては文字言語を媒介とした情報や論理的思考を表現する口頭表現タスクが必要と考え「ポスター発表」を会話授業のカリキュラムに組み入れた。タスクベースのカリキュラムをデザインする際、ポスター発表タスクによって、学習者同士の活発な話し合い、学習環境の広がり、質疑応答での活発なインターアクション等を期待した。実施後のアンケートと振り返りには概ね期待された効果がみられ、ポスター発表タスクに肯定的な反応が得られた。しかし、否定的な反応もあり、個々の学習者への配慮が必要である。また、今回の実践から、グループ編成、トピック、時間管理などの調整が学習効果やタスク活動に影響を与えることがわかった。

17. 考えて学ぶ初級会話教材の試み - インターアクションに注目して -

小池真理・中川道子・宮崎聡子（北海道大学）・平塚真理（北海道大学・北海道東海大学）

口頭表現能力を養成するためには、状況に応じた語彙、表現、談話構造を覚えると同時に、瞬時に相手の話をよく「聞き」、適切な応答を「考え」、「話す」という練習も必須である。北海道大学留学生センターの日本語研修コースの会話クラスでは、初級の段階からこれらの能力を養成することを目的として、会話教材を開発している。本教材では、従来のように最初にモデル会話が提示されるのではなく、状況を意識し、会話相手の発話を聞くことから始める。すなわち、学習者が実際の会話の当事者として状況を意識し、インターアクションの中で会話を進めていく練習を行うものである。実際に使用した結果、学習者に負担が少なく、より自然な状態で導入できるという利点があった。また、学習者からの評価を調査した結果、この教材の有益性が認められた。

18. 日本語条件表現の習得過程 - 中級学習者に対する縦断的インタビューから

堀恵子（麗澤大学）

日本語条件表現の習得過程に関して、4人の中級学習者に対して、約10ヶ月に渡り5回の縦断的インタビューを行い、産出の初期段階に焦点を当て、条件文のプロトタイプの用法の使用から、他の意味・用法へと使用が広がる過程を考察した。その結果、学習者は、言語に共通な条件文のプロトタイプであると考えられる「仮定条件文(未成立の事柄の成立を仮定し、後件でその結果を示す)」から産出した。形式はほとんどがタラであった。

タラ仮定条件文から、他の用法の使用へと広がりが見られたが、学習者に共通に、「意味領域の明確化の過程」が見られた。これは4段階からなり、(a)1つの形式を使用するが、意味領域は不明確で誤用がある、(b)1つの意味が明確になるが、意味領域の境界はまだ不明確で、誤用や「もし」の過剰使用が見られる、(c)1つ以上の意味が明確化する、すなわち多義性が理解され、使用される、(d)さらに周辺的な意味・用法への広がる、という過程をたどる。

19. コーパスを利用した副詞の分析 作文支援システムのための調査

戸次徳久（東京工業大学大学院生）・仁科喜久子（東京工業大学）

本稿では、大規模な構文解析器によりタグ付けされた新聞コーパスを用いることにより、日本語学習者に有益

な副詞の知識を得ることについて述べる。頻度 100 以上の副詞が 1800 以上得られることがわかった。コーパスから得られる知識として、まず、副詞・被修飾語の対のデータがある。この知識は、学習者が作文の際に、用言等に修飾語を加えたいときに CALL システムが提示すれば、役に立つものであると考えられる。また、副詞と共に起する文末表現の知識を得ることができ、これを用いることにより、副詞を、ほぼ決まった文末表現を取るもの、特定の文末表現を伴うことが多いもの、特に文末表現を選好しないものに自動分類できる。この知識を用いることにより、学習者が作文をするときに、必要な呼応表現を提示できると考えられる。

ポスター発表（上記 5 件を含む 14 件）

20. 学習者と受け入れ校学生による「協学」を目指す短期日本語研修の実践

藤川 美穂（学習院大学）

発表者の勤務校では、2002 年から協定校の学生を対象に 3 週間の短期日本語研修を行っている。本研修は、これまでの短期研修が経験してきた語学教室が日本へ移動しただけ、また、受け入れ校の学生と知り合う機会がないといった短期研修の課題克服を目的としており、受け入れ校の学生が研修の全課程に参加するという特徴を持つ。本発表では、学習者と受け入れ校の学生がともに研修に参加し、学び、成長するという意味での「協学」という新たな形態をめざす日本語短期研修の実践について紹介し、受け入れ校学生のレポートを分析、その成果について述べる。

21. 中上級日本語学習者の作文における文末モダリティ表現 違和感の原因は何か

渡部真由美・申媛善・高橋葉子（筑波大学大学院生）

留学生の書いた作文を読むと、かなり日本語の上手な人のものでも、時々不自然さを覚える。佐々木(1994)は、その原因を日本語学習者の文末における語調の強さにあるとみて、モダリティの観点から日本語母語話者と日本語学習者の作文における文末表現を比較している。本研究では、テレビ番組『クローズアップ現代』を見た感想文をデータとし、日本語学習者下位群、日本語学習者上位群、日本語母語話者群別に分析した。日本語レベルが上がるにつれて日本語学習者による文末表現が母語話者のものに近づくか考察した結果、以下の点が明らかになった。日本語学習者は母語話者に比べて文末モダリティ形式を持たない命題文を使用する率が高い。文末モダリティ形式を持たない命題文の使用が減るにしたがって、「真偽判断のモダリティ」で終わる文を使用するようになる。日本語学習者は真偽判断のモダリティの中でも、母語話者の低学年でよく使われる「と思う」を使用することが多い。

22. タイ語を母語とする学習者にとっての空間の「に」と「で」の使い分けの難しさ

タイ語の前置詞「thîi」との比較

タンチットメーター・ラッチャダー（筑波大学大学院生）

本稿目的は、タイ語を母語とする日本語学習者が日本語の格助詞を習得する際によく間違える空間の「に」と「で」について、誤用の要因をタイ語の観点から考察することである。その結果、日本語には空間を表す助詞「に」と「で」があり、さらに、「に」は事物・人物の存在位置を表す用法と、着点を表す用法に、「で」は動作・出来事の行なわれる具体的・抽象的な場所を表す用法とに分類され、使い分けられている。これに対して、タイ語は存在、着点及び、動作の場所を表す場合、日本語のように区別をせず、「所」を表す前置詞「thîi」で表される。また、日本語では、存在動詞もしくは所有動詞があるのに対して、タイ語ではそれらが動作動詞となる場合もある。このために、学習者は「に」を「で」に混同してしまうと思われる。

23. 日本語学習者のための構文表示ツール

吉橋健治（東京工業大学大学院生）・仁科喜久子（東京工業大学）

本稿では、日本語学習支援システムにおける新しい構文表示法を提案する。提案手法は、修飾語 被修飾語、並列、格要素 述語の三つの関係に異なるレイアウト規則を与え、これらを組み合わせることで文の構造を表示するものである。提案手法は、従来手法と比較して、文の大まかな構造が分かりやすい、並列構造の係り受けが分かりやすい、画面に収まりやすいといった特徴を持つ。日本語学習者を対象とした評価実験の結果、提案手法は従来手法と比較して、より分かりやすく、より短時間で構文の把握ができることが分かった。

24. 口頭運用能力の育成を目標としたサバイバルコース JICA 研修員のためのコース・デザイン

池田 恵・橋本 優香（ひろしま国際センター）

ひろしま国際センターでは、JICA が海外から受け入れる技術研修員を対象に口頭運用能力の向上を目標とした日本語研修を実施している。当初は市販教材を使用していたが、研修員アンケートからは、指導内容が多すぎ、進度も速すぎるといった回答が多く寄せられていた。これは、45時間という限られた時間の中で、教師が指定された内容を消化しようとするあまり、文法の解説に多くの時間を費やし、その結果、運用につながる練習時間を十分に取れていないことが原因であると考えられた。そこで、当センターでは、同じ時間で研修員が習った日本語が使えるという実感を持てるよう新しいコースデザインを試みた。その結果、研修員、授業担当講師双方から一定の評価が得られ、コース終了後の追跡調査では日常生活の中で研修員が日本語を使用している状況も確認できた。本稿では、このコースの実施内容を紹介し、その成果と課題に触れる。

25. 「辞書引きタスク」 - 初級最初期からの語彙教育の再考 -

増田真理子（東京大学）

本発表の目的は、初級初期の学習者に対して行っている日英辞書を用いた「辞書引きタスク」の方法と思想を紹介することである。このタスクは、「未習語彙の含まれた短文の意味を辞書にアクセスして調べる」という一連の「認識作業」のプロセスを通して、「文字の認識」「動詞などの活用」「文構造の分節」等の学習サポートを目指すものであるが、その特徴は、従来と異なり、学習開始直後から連続して行っていく点にある。発表では、これまでの初級教育では、語彙教育に関して、1) ひらがな学習時とその後の連携が薄い、2) 動詞の活用を既習語彙のみで教えるため未習語の活用形（テ形など）に接した際の辞書形への復元力が弱い、3) 文型提示に連動して、クラス全体が同じ語彙を共有して積み上げることが過度に重視される傾向にある、等の問題点を指摘し、その解決策のひとつとして、このタスクの活動内容を紹介する。

26. 非漢字圏初級学習者のための「漢字読解タスク」の開発 入門期の漢字認識に注目して

前原かおる（東京大学）

本発表で紹介する「漢字学習タスク」は、非漢字圏の初級学習者が、大学のキャンパスや駅、その他インターネット上のウェブサイトなどの日常生活場面において、必要な情報を読み取り、適切に対処できるようになることを目指して、開発中の教材である。情報のスキミングを指向した読解教材としては、既にさまざまなものが見られるが、本教材は、入門期の早い段階からの取り組める点、また、漢字の字形や意味の認識、および、熟語の語構成や接辞などといった漢字の知識が読解の鍵を握るように作成されている点に、その独自性がある。本発表では、具体的な教材例とその作成、実施の概要の紹介を通して、本教材の意義について議論する。

27. 日本語教育における助数詞の扱いの問題点 助数詞「本」を例に

北川幸子（早稲田大学大学院生）

助数詞はひとつの学習項目として、ほとんどの日本語教科書で取り上げられているが、初級の早い段階で取り上げられることが多いため、指導されている用法や数えられる事物の選択が、初級の語彙や文型の制限をかなり受けていると思われる。本稿では助数詞「本」を例に、初級日本語教科書と実際の使用で、その用法や数えられている事物がどのように異なるのか調査し、日本語教育での助数詞の扱いの問題点を挙げる。今回行った調査の結果、初級日本語教科書では「鉛筆」や「傘」といった細長い形状のものを数える用法しか取り上げられていないことがわかった。しかし、ドラマの脚本を用いた調査の結果では、それ以外の用法がいくつか見られた。助数詞「本」の用法には単に視覚的に細長いものを数えるものだけでなく、認知的な側面があり、自主学習での応用的な習得は難しいと思われる。教室の中でどのように指導していくべきか、今回の調査結果をふまえて提案を行う。

28. 漢語と音読み・訓読み・母語訳問の変換力を測る調査

小島 聡（東京工業大学）

漢字の音読みと訓読みをバランスよく習得して語彙を効率的に増やしていくことができる漢字教育法を開発するための指針を得るため、韓国学習者を対象に漢語と音読み・訓読み・韓国語訳問の変換力の高さを測る調査を行った。その結果、漢語から韓国語および音読みから韓国語への変換力が高く、韓国語から漢語および韓国語から訓読みへは低いことが分かった。漢字の書き取りは難しいため韓国語から漢語への変換の成績が低いという結果は当然と考えられるが、一方で訓読みの漢字への変換は比較的成績が良いという結果も得られた。

【総会出席のお願い】

当日は午後 1 時 40 分より総会があります。会則変更等の重要議題を議決する予定です。定足数に達しないと総会が成立しませんので、研究会参加者は必ず総会への出席をお願いします。

【会費納入のお願い】

2005 度の会費（3000 円）が未納の方は早急にお支払いいただけますようお願いいたします。2 年未納の場合は会員資格を失いますのでご注意ください。会費は、研究会会場受付にてお支払いいただくか、郵便局にて以下の口座にお振込みください。会費振込口座は電信振込しかご利用いただけませんので、ご注意ください。ご不明な点がありましたら、jlem@ryu.titech.ac.jp まで email にてお問い合わせください。

【振込先】 記号：10140 番号：69076511 加入者：日本語教育方法研究会

【10 周年記念誌発行のお知らせ】

このたび JLEM 発足 10 周年の記念誌を発行し、2004 年度以前からの会員にお届けしました。新会員・非会員の購入希望者には 1 部 2000 円で販売します。目次をホームページ <http://www.jlem.info/> に掲載しますのでご覧ください。春の研究会場で販売予定です。来場できない方は上記の会費納入と同じ口座に料金をお振り込みの上、jlem@ryu.titech.ac.jp にお知らせくだされば郵送します。

【東京工業大学大岡山キャンパスへの交通】

1. 品川駅・東京駅・上野駅から（は乗換え）
 - ～ JR 大井町駅(京浜東北線) 東急大井町駅(大井町線)～大岡山駅
 - ～ JR 目黒駅(山手線) 東急目黒駅(目黒線)～大岡山駅
2. 羽田空港から
 - ～ 京急品川駅 JR 品川駅(京浜東北線)～大井町駅 東急大井町駅(大井町線)～大岡山駅

大岡山駅より正門まで徒歩 1 分。正門から会場の西 9 号館までは案内板を出します。

詳しくは東工大ホームページ <http://www.titech.ac.jp/> の「交通案内」をご覧ください。

【昼食について】

当日は休日のため学内の食堂は営業していません。大学周辺の店を利用するか、駅前のスーパー・コンビニ等でお弁当をお買い求めの上、会場でお食べください。

【懇親会】

第一生協 2 階の東京ケータリングにて懇親会を行います。会費は 2000 円の予定です。是非ご参加ください。